

カーライル・エマソン・内村鑑三

——『代表的日本人』に於ける伝統と変容——

鶴 木 奎治郎

一 どうしてこの三人なのか

理想の人間像 カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881)・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82)・内村鑑三 (1861-1930) と言えば、それぞれイギリス・アメリカ・日本の一面を代表する思想家である。もっとも三者とも論理性よりも、叙情性の方がたちまざっていたから、言葉の厳密な意味に於ける哲学者である、とは言えないだろう。それにもかかわらず三者とも、ひどく具體的な人間論——偉人論——にこだわっていたから、その代表作を検討する事によって、アングロサクソン文化と日本文化に於ける理想の人間像——もっと有り体に言えば相互の、象徴としての人間論を比較考察できる筈である。

カーライルとエマソン 幸な事にこの三者は具体的な接点があり

すぎる程あるのである。先ずエマソンは正にカーライルの面識を得んが為に渡欧、一八三三年七月、寒村クレイゲンパトック (Craigputtock) で共に一夜を過して、目出度くその念願を達成した、という事になっている。以後両者は親密な文通を重ねた。そしてカーライルの大著『衣服哲学』(Sartor Resartius, 1836) がアメリカで出版されると、エマソンがこれに序文を添え、その御返しにカーライルがエマソンの論文『自然論』(Nature, 1836) を絶賛する、やがてカーライルの『英雄崇拜論』(On Heroes, Hero-Worship and the Heroic in History, 1841) が世に出ると、追いかけるようにエマソンが『代表的偉人論』(Representative Men, 1850) を出版する、という仲にまでなった。

内村とカーライル ところで我が内村はカーライルやエマソンとどういふ接点があったのか。彼は一八八五年に渡米、いきなりエ

ルウインのペンシルバニア州精神薄弱兒童養護学校の熱心な看護人、ついでアマスト・カレッジで謙虚なる学生生活、という経験を与えた上で、一八八八年に帰国する。以後彼の文章にはカーライルが、又、そのカーライルによって紹介されたクロムウエルが、陸統と登場する。例えば「カーライル著『クロムウエル伝』の余に及ぼせし感化に就ては余は之を叙するに足るの言辞なきを歎ず^(1.67)」。「余は確かに信ずる余の神が其時特に余に命じて『クロムウエル伝』を購はしめ給ひしを^(1.68)」、「嗚呼カーライルの『クロムウエル伝』よ、汝は余に取りては火の書である^(1.68)」と、その誉め様はただ事ではない。こうしてクロムウエル―カーライル―内村の三位一体が連動して、「タンテ、カーライル流の人間、正しきこと激烈にして^(2.50)」と大上段に振りかざしたかと思ふと、次は「カーライル曰く、『国家を救はんとするが如きは愚者の業のみ、真正の智者は自己の本職を全ふせんことをのみ是れ努む^(3.25)』と援用し、更に「斯くも(クロムウエルは)根本的に無慾の人でありましたからこそ、彼は英国に自由の堅い基礎を置くことが出来たのであります……彼の公明正大が天地をも動かすを得たのは全く彼の非世界観に由つたのであると思ひます^(4.147)」と、その内容を説明敷衍する。どうやら内村は、所謂、世間並みに成功した政治家・軍人・宗教家という基準でクロムウエルを評価するよりも、ピューリタンとしての彼の真摯な求道精神のみを、問題とするのである。又、そのような評価を与えたカーライルを鵜呑みにするのである。彼等

に於けるエゴティズムの存在などは凡て棄却するのである。それでも内村即カーライルの世評が高くなりすぎると、さすがに厚顔の内村も気になるとみえて、しきりに弁明を試みる。

曰く日本のカーライル、曰く小カーライル、曰く第二のカーライルと……是れ余に取つては甚だ名譽なるが如くに見えて実は迷惑千万なりといはざるべからず、カーライルは英国人なり、余は日本人なり、余のカーライルにあらざるは言はずして明かなり。余はカーライルと宗教を異にし、人生觀を異にす……彼(カーライル)が上帝の指導はオリバー・クロムウエルを以て止まりし如くに信ぜしに反して余は其現在未來までに継続するを信ず……余はカーライルの弟子にあらず、余の師は外に在り、然れども余はカーライルを尊敬する者^(5.32)の一人なり、余の彼に於けるは釈迦、マホメットに於けるが如し……^(5.25)

(弁明)

語るにおちた、と皮肉の一つも言いたくなるような長舌舌の弁明であるが、ここで異教徒のマホメットを引き合いに出した事だけは、是非記憶しておいていただきたい。

内村とエマソン さて次は二番目の問題であるが、内村はエマソンとはどれ位の関係があつたのか。カーライルに熱狂的に親炙したような傾倒ぶりはないにせよ、やはり相当の思い入れではある。先ず「カーライルを英人に紹介せし者は、米人(殊にエマソン)^(6.207)なり」と来るので、ヤッパリと言いたくなる。又、ニューヨーク

滞在中の一日本領事がエマソンを皆目知らないのを発見して、「ラルフ・ワルド・エマソンと其感化に就ては全く何事も知らざりしなり。而も彼は依然として亜米利加外交の専門家と看做さるゝなり!」と大袈裟に驚いてみせる。返す刀で「(日本の)男子生れて二十歳、少しく筆を廻すの技倆に加ふるにエマソン論集を少しく読み了れば、彼は新聞記者となりて時事に喩を容るゝを得べし、批評家となりて何れの著述をも評し得べし……」と迫るのだから手厳しい。どうやらエマソンを生半可に囁るのは全く知らないのと同然だと断罪しているように思われる。明治時代でも昭和の大御代でも、それ程事情は変っていないのである。更に「エマソン曰く、『汝の車を大空の星に繫げよ』」の援用で分るように、内村がここで評価しているのは、天職を全うする事、天意にかなう事を勧めるエマソンの求道精神なのである。結局「エマソンはカーライルを評して曰へり、彼に接せざれば彼の氣力と技倆とを量るべからず、彼を知て彼の著述は僅かに彼の少部分なるを知る」という内村の孫引きに至ると、正に彼がエマソンをカーライルの延長線上に捕えていたという事がよく分るのである。

二 二つ二つ風に普及していったか

父と子　ここで拙論の主旨に焦点を合わせながら、三人の評伝を重点的に整理してみよう。先ず三人とも極めて個性的で、信念の強固な父親を持っていた。カーライルはピューリタンの父親から、

宗教こそ人間生存の要諦である事を学び、カーライル三十七歳の時に死別。エマソンになると僅か七歳で父親と死別したが、それでも父親のユニテリアン信仰を継承する。我が内村も武士を廃業した父親から武士道的なリゴリズムを受けつぎ、四十七歳で死別こうしてみるとエマソンだけが、父親の記憶も定かでない位だが、それだけに他の二人にない温雅さと寂しさをその性格の中に蓄えているように思うのである。それはともかく、三人が三人とも父親の影響を受けていて、狭義のセクトや世俗的な教義に捕らわれる事を嫌っているのが面白い。

講演者としてのカーライルとエマソン　それにしても三人が三人とも演説の名手である。もっともカーライルの場合は講演を極度に嫌悪し、その都度、七転八倒の苦しみだったというのだが、その苦悶の程度が大きい程、成功したというのだから、これはやはり皮肉でなしに、うまいという事になるのであろう。そもそも『英雄崇拜論』自体が、一八四〇年度に行われた六回の講演を潤色して出来たものである。それもカーライルの友人達が、カーライルの窮乏を見かねて、彼を救済するために行ったというのだから、結局は金づくである。

エマソンになると、最早、歴とした牧師である以上、職業柄、説教を避けて通るわけにはいかない。やがて講演者として自活するようになる、尚更である。さて一八四五年六月、カーライルにあらかじめ書簡を送り、間髪を入れず同年末から、翌四六年に

かけて、ボストンで七回の講演を行った。これこそ『代表的偉人論』の主旨が世に喧伝された嚆矢であるが、このテーマは余程気に入ったとみえて、更に翌一八四七年にはマンチェスター、ロンドンで同じ講演を繰り返す事になる。カーライルの講演が苦悶する獅子吼であったとすれば、エマソンのそれは善良、平明を極めた、激みなく流れるアメリカ精神の清流であった。エマソンの主旨にも誇張はあったのだが、彼の穏やかな性格がその口頭による表現を緩和したのであろう。

散文としての『代表的日本人』 我々の内村はその誇張癖とか、宗教観とか、修辭法という観点から見れば、いささかカーライル寄りである。だが講演の巧き乃至は講演そのものに対する関心という点からみると、明らかにエマソン寄りである。ところで当面の課題である『代表的日本人』は、当初 *Japan and Japanese* (『日本及び日本人』一八九四) と題して刊行され、引き続き *Representative Men of Japan* (『代表的日本人』一九〇八) と訂正改版され、英文で世に問われた。それも「其原稿は……京都閑居の時に成つたものである」と本人が断っている通り、講演原稿とは全く関係が無い。然し「一友人の手により多くの訂正を加へられたるものである」と本人が「序文」で自認している以上、如何にこの本の普及を内村が期待していたか、という証拠になるのではないか。

英文『代表的日本人』の改版が出ました、英文の読める方

には読んで戴きたくありません、日本語で言ひ兼ねる事を欧文を以て言ふことが出来ます、日本を世界に向つて紹介し、日本人を西洋人に対して弁護するには、如何しても欧文を以てしなければなりません……私の貴ぶ者は二つの J^ニであります、其一は Jesus (イエス) であります、其他の者は Japan (日本) であります、本書は第二の J^ニに対して私の義務の幾分かを尽したものであります…… (13・180, 181) (菊花薫る)

ちなみにこの改版が出版された時の内村は四十七歳。これをカーライルが『英雄崇拜論』をものした時の四十六歳、エマソンが『代表的偉人論』を出した時の四十七歳と比べると、その年齢の奇妙な暗号に驚くのである。

三 どういう性格を持っていたのか

政治嫌い 拙論も三者三様の英雄論乃至偉人論の検討をすべき段階にはいった。先ずカーライルが扱った英雄は、オーディン、マホメット、ダンテ、シェイクスピア、ルイテル、ジョンソン、ルソオ、バアンズ、クロムウエル、そしてナポレオン。一方のエマソンは、プラトン、スエーデンボルグ、モンテーニュ、シェイクスピア、そしてゲーテ。我が内村にあつては、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、そして日蓮上人。ところでこの三人には共通の好み、とも言うべきものがあつた。第一に、所謂政治家・軍人といった類いの、世俗的な成功者・権力者を軽蔑してい

たという事実がある。もっともクロムウエル・ナポレオン・西郷など、一寸見た眼にはこの範疇に入るべき人物であるが、考えてみると彼等は何れも最後は失敗している。

文学嫌い 次に三者とも所謂、文学——特に小説や演劇の如きフィクションの作家を甚だ好まなかつた。ところがこれにも例外があつて、例えばシェイクスピアはカーライル・エマソン御二人の眼鏡になつてゐるのだ。そして我が内村だけがその人選の中に、日本の文学者を一人も含めていないのだ。然しその内村も「カーライルが曾て曰うた事がある、『英国は印度帝國を棄て、もシェークスピア全集を有するが故に富國である』と」肯定的に援用する。つまり「何故に大文学は出ざる乎」(一八九五)「如何にして大文学を得ん乎」(一八九五)などの愛國の文章に於いて、「大文学なる者は世界的思想の成体なり」(15.3)と喝破した内村は、要するにこの種の大文学が、この日本に欠如している事を告発したのである。はっきり言つて劇作家のシェイクスピアは、思想的な(大文学なるが故に、内村によつてお目溢しにあずかつてゐるのである。

三番目に全員に共通するドイツ文化への——なかんずくドイツ哲学とドイツ文学に対する心情的共感をあげておこう。換言すれば宗教的にして真摯なるイデーに対する、憧憬と言つてよいかもしれぬ。恐らくここら辺りに、微妙に異なる三者三様、とは言いながらも、どこかに共通の性格的一致があるのではなからうか。

四 英雄と偉人はどう違ふのか

カーライルに於ける英雄論 以上の認識に基づいて、早速個々の英雄論、及び偉人論の原典に即して具体的に検討してみよう。先ずカーライルは英雄不在の時代になつた事を確認した上で、いきなり彼のキイワードを提出する。「我々の要するものは、遊戯ではなくて熱心さ(earnest)である。この世で生き抜くという事は、最も熱意を込めた事柄である」。(16.6) ついでこの書物の白眉とも言うべき「マホメット論」(The Hero as Prophet. Mahomet: Islam)が登場する。

敢て言わせてもらつたら、一個の偉人(a Great Man)が真実(true)で無い事があり得る、などとは全く信じ難し……ナポレオン・バインズ・クロムウエルなど、いやしくも何事かを為し得る人は、何はともあれその事柄に真正銘熱心(in right earnest)たらざるを得ないのである、これこそ私(19)の所謂誠実な人(a sincere man)である。私が極め付きの、誠実さ(sincerity)と直言する時には、深遠で、偉大な、本物の誠実さ(genuine sincerity)を指しているであつて、これこそ、少しでも英雄的だと言える(in any way heroic)人間の第一条件なのである……偉人(the Great Man)は誠実でしかあり得ぬ(cannot help being sincere)のである……

これでも大分端折ったのだが、まるで誠実さの押し売りである。そしてとに角 earnest = true = sincerity という、カーライル流英雄の、性格に関する構造式が出来上ったのだ。だがこれだけでは如何にも頼りない、もっと具体的な英雄の能力について何か規定はないのか？ 無いわけではない、但し「独創的な人間 (original man) とは、無限なる未知の世界からの情報 (tidings) を伝えてくれる使者である」と、これでおしまいである。英雄を、神がかり的な予言者だ、神意を受けた使者だと言っているだけである。物足りなく思ったのは、どうやら私だけではない。

一体どういう方法で偉人を認め、善良な、真の英雄が分るのか。明かに邪悪に他ならぬ虚偽の人間と何処が違うのか。

カーライルはあまりにも自分の独断に熱中しすぎて、クロムウェルやナポレオンの欠陥も、唯唯として見過してしまつたのである。どうやら英雄は絶対者 (absolute) でなければならぬという事のような。というより、カーライルが一旦ある英雄に「誠実だ」(“sincere”) という折り紙をつけたら、その人物を無条件で容認する癖があつたのである。(序説)

ニーマイヤー (Carl Nie Meyer) によるこの短評はカーライルの欠陥について余す所がない。一見、難解に見えるカーライルの見解も、実は馬鹿馬鹿しく簡単な、ドグマだったのである。

エマソンに於ける偉人論 二番手のエマソンはどうか。「偉大な人は見ただけで分る。彼等は期待に応え、収まるべき所に収ま

る人である」。(17.7) 「彼等は影像的 (pictorial) 或いは表象的 (representative) な資質を持っており、知性という点で我々の役に立つ

……彼等は先ず事物を代表し、ついで観念を代表する」。(17.8) ここ迄読むとカーライルの思想と同工異曲に思われるが、それにしては代表という言葉自体が新しい造語なのである。一体、誰の代表なのか、そしてこの代表が一体何をしてくれるのか。「とに角、事実、我々は我々の代理人 (proxies) によって何倍にも増殖するのだ。どんなに安々と、我々は彼等の労力を利用する事だろう」。(17.12)

なるほど、一般人である我々はどういう代理人の恩恵を被つて仕事の能率化を図れる、というわけなのか。要するに「彼等が何を

知っているにせよ、彼等は我々の為に知っているのである。新しい心が出る度に、自然の新しい秘密が開示される。最後の偉人が登場する前に、この聖書が閉じられる事はない」。(17.20) なにしるパリの動物園を見て、博物学者になりたいと興奮したエマソンである。

彼の精神にとつては、聖書 = 自然 = 偉人の心による合理的説明、という自然学的な、且つ若干プラグマティックな三段論法が出来上つていたのである。之はカーライルの思想にはなかつた構造である。結局「我々の受容性 (receptivity) が無限だから我々は英雄

的人間 (heroic persons) と交わる事を好む……エネルギーという点では我々は大いに (偉人に) 劣るが、受容容量 (capacity) という点では悉く優れているのだ……」(17.25)

どうも様子がおかしい。どうもエマソンの言う偉人とは、絶対

的存在者ではないようだ。たかだか我々に伝染し得る位の能力、せいぜい我々が模倣し得る位の能力、その程度の能力が偉人の能力であれば、はたして之が真に独創的な資質と言えるであらうか。この間の事情を実に旨く説明したのが、彼の「シェイクスピア論」(Shakespeare; or, the Poet) である。

偉人 (great men) は独創性 (originality) よりもむしろその大きき、広さが人並以上に優れているのである。蜘蛛のように糸を自分の腹から押し出して網を作り出す能力や、粘土を見つけて煉瓦を焼き家を建てたりする能力を独創的だと言いたいのなら、どんな偉人でも、独創的ではあり得ない……英雄 (the hero) はきしめく騎士達の中にあつて、群がる事件の中にもまれて、然も万人が何を欲しがっているかを見てとり、皆と欲望を共にし、その結果、予定の目標を見定めて、力を貸すのである。最も偉大なる天才 (the greatest genius) は最も他者のお蔭を被っている人 (the most indebted man) (17:186) である……偉大な天才の能力は、独創的 (being original) という点にはありつこない、と言つてもよ。それは徹頭徹尾、受動的 (teopive) なものである。(17:191)

エマソンははっきりと、一般人の最大の特質であつた筈の受容性を、同時に偉人の最大の特質にしてしまったのである。ここ迄来ると両者の間に質的な差異は全く無くなるのだから「現代の英雄は、相対的に偉大である……」と帰結されるのは、見やすい論

理である。だがエマソンのこの表明は誠に以て、形容矛盾である。何故ならこの論法で行く限り、少くとも我々一般人は相対的にすら、偉大ではないのだから、英雄は、我々より、やはり、より偉大だ、という事になってしまう。そしてこれは恐らくエマソンの言いたかつた真意ではないだろう。それかあらぬか、ニコロフ (Philip L. Nicoloff) は、エマソンに於ける偉人の役割を「いわば触媒 (catalyst) のようなもの」と述べたが、穿ち得て妙、である。殆ど英雄、一点張りだったカーライルの用語が、時と場合に應じて、英雄・偉人・天才とさまざまな展開を見せるのも、彼が民主主義を標榜する、新大陸の人士であつた事を物語っている。内村に於ける偉人論 我々の内村に於てはどのような構造になっているのか。彼はエマソン以上に、というより、彼になつて始めて英雄と偉人の区別について大いに拘るのである。

不幸なる訳語の中にカーライルの Hero Worship を英雄崇拜と訳せしが如きにはあらざるべし、ヒーローは英雄にあらず、ワーシップは崇拜と訳すべからず、英雄なる語は顯然たる東洋的意義を含むものにして、或は人心を攪擾すと云ひ、或は人を欺くと云ふが如き、一種異様の感を起すの語なり……若しコロムウエルを称するに英雄を以てせんか、是れ甚だ彼を誤解する事なり、彼は寧ろ聖人にして英雄にはあらずりし、彼は偉人と称するを得るも英雄とは称すべからず、それは彼は智略の人にあらずして、信仰誠実の人にてありたれば

なり……英語のワーシップは亦必しも崇拜を意味せず、崇拜なる語は人以上の实在者に対して用ゆべき語として存すべきものなり……而して人にして他の人を崇拜せん乎、是れ彼の人格を低める事にして墮落是より大なるはなし、コロムウェルたり、西郷隆盛たり、彼等は大人物たりしには相違なしと雖も、吾人の崇拜を奉るべき人物にあらず……

(人物崇拜の害)

これは牽強付会と言ってもよい程のカーライル——ひいてはコロムウェルの名指しの弁護である。西郷とコロムウェルの同一視など、滑稽感をそそる程の臆ましい文章であるが、とに角、彼の的方法論がはっきりと分る貴重な文章である。ところがエマソンに関してはこれ程、向きになつた文章は殆ど無い。「独り立て独り行ふ、是を独立の人とは云ふなり……」^(20.12)「古来より世に大事業をなし又大成功を奏せし人は能く己れの天職を見認め之を尽せし人なり」^(21.2)などの内村の主張も、多分にエマソン流の自己信頼 (self reliance) の匂いがするのだが、エマソンの名前は出て来ないので、注意しないと、その影響を見逃してしまふ怖れがある。然し *Representative Men of Japan* とどうエマソン張りの標題など、自らがはつきりとエマソンの徒である——と言うよりも、エマソンの徒でもある事を公言した証拠だ、とは言えないだろうか。以上の事を念頭において、次章では内村に与えた両者の影響の数々を、『代表的日本人』から拾ひ出してみよう。証拠固めを

してみよう。

五 内村はどういう影響を受けたのか

最も他者のお蔭を被った人 内村の選んだ五人を見ると、はっきりと職業——というよりも、職能を示すト書きが、人名の次に記されている。即ち西郷は「新日本の建設者」であり、上杉は「封建領主」であり、二宮は「農民聖人」であり、中江は「村落教師」であり、日蓮は「仏教僧侶」である、という次第だ。カーライルやエマソンの付したト書きが、詩人とか、文人とか、帝王とか、懷疑家とか、いささか抽象的な身分階層を示す標語であつたのに比べると、非常に現代的である。換言すればエマソンの立場をより徹底した態度、と言えるかもしれない。

それにしてもこの五名の代表的日本人には、何れも彼等に知恵を授けてくれた恩人があつた。その意味に於いては、彼等はエマソンの言う「最も他者のお蔭を被った人」であつた。それと同時に、彼等は当時の「万人の見る方向を見」^(17.190)ていたし「万人の手は天才の行くべき途を示」^(17.190)していたのである。即ち彼等は一般民衆に恩恵を与える人でもあつたのである。即ち一種の仲介者なのである。内村は史料収集が不十分といわれるこの著作の中で、このエマソンの論理構造だけは守り抜くのである。更にエマソンが暗々の中に前提としていた、聖書、自然、偉人の心による、合理的、解明、という原則がある。このエマソンの原則順守主義も我が内村にあ

つては一層、徹底している。つまり「人為の『律法』(法)、ノモス」と、永遠に存在する『真理』(道、ロゴス)とを、明確に區別^(12.132)し、それも後者を断然上位に置く、という姿勢が、終始一貫、貫かれるのである。

結論だけ先取しても一向に面白くないので、紙数を気にしつつ、ほんの少々、原文から実例を引用して拙論の証拠にかえておこう。先ず西郷には「彼自身の藩侯たる薩摩の島津斉彬」と「水戸藩の藤田東湖」という師があり、両者から『我国を歐羅巴と対等たらしむべき』^(12.253)「実際的方法」^(12.253)を学び、その結果、「彼を景慕し来る弟子達」を残した。彼の最期を決めた西南戦争の場でも「始終渝らず受身の人物 (a passive figure) であつた」とは、エマソンのしばしば用いた 'receptive' という言葉を想起させ、その原則が有名な「敬天愛人」であつたという史実を納得せしめる。二番手の上杉はその師細井平洲から皮肉な事に「師恩を忘れざる」態度を学び、「荒唐荒蕪し」^(12.61)「た己の封地を見ては「大なる教訓を学び、はてはその「両親によつて娶られた(白痴の) 婦人」を生生涯、妻として守り抜く事によつて、「身斉ヒテ家斉ヒ、家斉ヒテ国治マル』^(12.77)という原則の正しさを体現したのである。最後に彼の「埋葬の当日、数万の人民、路傍に拜伏し」^(12.80)とあるから、この一般民衆が直接の弟子という事になる。

三番手の二宮と四番手の中江は互いに共通点がある。両者とも、封建時代にあつては極めて微賤な階層の出身であり、彼等の教師

も又、素朴を極める。即ち貧乏な二宮は強慾な伯父からも「伯父の言ふことに道理がある」と、功利主義の哲学を学びとり、同じく貧乏な中江にとっては「彼の天は母の笑顔の中にあつた」と称するだけで十分であつた。二宮の藩主であつた小田原侯、中江の藩主であつた岡山侯が人徳溢れるこの二人を抜擢し、本人達が嫌がるのに大変な知遇を与えたが、それは同時にこの二人の啓蒙君主達も、二人から大変な恩恵を被る事になると予想されたからだ。彼等は農民達に、又、弟子達に「もろもろの業と感化」^(12.110)或いは「教訓と余徳」という単純な美德を残して世を去つてはいるが、彼等の準拠した法則も非常に単純で、自らも農民だつた二宮の場合は「自然」はその法則に従ふ者に豊かに報いるという此の簡単な原則^(12.80)だけ、中江の場合も「道ハ永遠ヨリ存在ス」^(12.132)或いは「謙ハ虚ナリ、心、虚ナレバ、即チ好悪ノ判断、自然ニ出ヅ。」^(12.133)ともつぱら謙虚そのものの道徳を説くだけである。それにしても上杉といひ、二宮といひ、中江といひ、凡て実利の人であつた、という事は記憶するに値する。

最も原典に忠実であつた人 五番手の日蓮の場合でもノモスよりロゴスに絶対服従し、あまつさえ「前代未聞なる……辻説法」^(12.150)を行ひ——つまりカーライルやエマソンの講演に相当する——その教義を弟子の日照や日像、その他無数の帰依者に伝える事が出来たところが、これ迄の四名と違って日蓮にあつてはいささか事情が異なる点がある。それは仏教の「権威ある經典の何であるか」^(12.150)に迷

った日蓮が、遂に釈迦の「生涯の最後の八年間の Saddharma-Pandarika Sutra (妙法蓮華經即ち法華經)」を選び、「この最後に録された經典が釈迦の全生涯の教説の精髓を含んでゐる」と判断した点である。釈迦はこれ迄の四名の偉人達が師事した生身の先輩達とは全く次元の異なる存在者である。つまり単なる人間としては存在し得ぬ釈迦その人よりも、日蓮はむしろ釈迦が定立した經典への忠実な僕たらん事を志したのである。断つておくが、原典至上主義者とは、原典に注解を加える者、の謂ではないのである。原典に無条件で従う、という意味なのである。ここに於いて、内村の日蓮論が、既に紹介したカーライルのマホメット論と驚く程類似して来るといふ事実を、指摘せざるを得ない。

『不信実なる人間が宗教を発見したといふか』と、カーライルは叫ぶ、『不信実なる人間には煉瓦の家を建てることもできないではないか。』……此の人(日蓮)の死後七百年の今日、四千の僧侶と八千の教師を擁する五千の寺院と、此の人の定めた方式に則り其の中にて礼拝しつゝある百五十万乃至二百万の信徒を見る、而かも余は此等は凡て恥知らずの山師(日蓮)の仕事と考ふべしと聞かされるのである……實際、日蓮の生涯は何時も余をして多妻主義を除いたマホメットを想起せしめる。同じ強烈さ、同じ病的な熱狂、しかしそれにも拘らず目的に対する同じ誠実、衷なる憐愍と柔和との豊かさ、一に於けること他に於けるが如くである。たゞ余は日

本人(日蓮)はアラビア人(マホメット)より、前者が彼の經典に信頼したるは後者がそのコーランに信頼したるにまさつてゐた点に於て、より偉大なりしと信ずる。斯かる類るべき書ありて、形而下的勢力は日蓮にとり必要欠くべからざるものではなかつた……(日蓮上人)

遂に辛抱し切れなくなつたのか、内村は又もやカーライルの名を出してしまつた。但し日蓮の方を、多少なりともマホメットの上位に置いたのは、彼の愛国心のせいである。それでいて、エマソン流の方法論は頑に伏せたまままで……。というわけで、もう一度この『代表的日本人』の中で、一体どれ位、内村がカーライルのキイ・ワードである「誠実さ」を使つたか、勘定してみると、驚くべき回数になる。煩瑣にすぎるので、敢て詳論しないが、とに角、内村は、西郷にも、上杉にも、二宮にも、中江にも、そして日蓮に至る迄、全員にこの誠実という、キイ・ワードを惜しみなく乱発しているのである。

六 文化を並列させる事は可能なのか

アングロサクソン文化と日本文化 死に先立つ事一年前の一八八一年、既に文章も書けない程、盡碌していたエマソンは、乞われ儘にマサチューセツツ歴史協会に於いて、しゃんとした講演を行った。題して「カーライル」(Carlyle)、物故したばかりのカーライルへ対する追悼演説である。「既にイギリスではロンドン

塔と同じ位、名物になってしまったカーライル御大と話が通ずる、なんて言い切れる人はアメリカにはおるまい。同様にカーライルの方だって、我々アメリカ人を満足させる事は金輪際、出来っこないし、第一、我々のききたい質問に対して、答への用意もない(22・490)だろ(22・490)う。あの楽天家のエマソンにして、この悲痛の言ありしか、と膝を打ちたくなる。

ところが我が内村になるとこうだ。「余は英国又は米国の前に平伏せず、然れども英国をして今日の英国たらしめ、米国をして今日の米国たらしめし主義と真理との前に平伏す^(23・219)」。これ又、相当地楽天的な内村にしては相当に悲観的な告白ではなからうか。カーライルがエマソンにも分らなかつたのだとすれば、果して内村に——ましてや我々に分るだろうか。やがてこの屈折した心理が、イギリスの新植民主義、アメリカの拜金主義・人種差別への攻撃へとつながっていくのであるが、それはさておき、このような微妙な精神的紆余曲折が、事態の変動に敏感に反応する魂が、真の比較文化的作業を可能ならしめたのではないか、と思うのである。彼がこの書物で繰り返し力説しているのは、(キリスト教徒から見たら)異教徒に他ならぬ、代表的日本人たちが、その行為に於ては真正なるクリスチャンと全く変らなかつた、という事実なのである。そういう意味に於いて、『代表的日本人』は、日本的な陽明学を、儒教を、仏教を、少くとも文化価値という一点に於いては西洋伝来のキリスト教と平等なものだとして並列せしめ

た作品だ、少くともそういう努力をはらった作品だ、という点を私は評価したいのである。だから読み進んでいくと、まるで西歐のクリスチャンの方が、(仏教徒の立場から見たら)異教徒である、咎めているような気がしてくる。然もそれは、札付きのクリスチャンであった内村が果した仕事なのである。こうなるとあれ程、フィクションを嫌った内村が、作り上げた、見事な日本文化論のフィクションであるといわねばならぬ。我々としてはこの明治人の精神的緊張にたじろぐのみであるが、それは、内村の抱えた問題が依然として未解決のまま残されている事を、我々が改めて自覚させられるからである。

(1) 内村鑑三『読書余録』『内村鑑三著作集 第十七卷』(岩波書店、昭和二十九年)。

※(1・67)とある時には、文献番号1番の著作の67頁である事を示す。以下、凡て同じ。

- (2) 内村「春日黙想」『著作集 第三卷』(岩波、二十九年)。
- (3) 内村「カーライルの言」『著作集 第三卷』
- (4) 内村「時勢の要求と基督教」『著作集 第四卷』(岩波、二十九年)。
- (5) 内村「弁明」『著作集 第三卷』
- (6) 内村「超国家的文学」『著作集 第三卷』
- (7) 内村「歐羅巴を知るとは何ぞや」『著作集 第三卷』
- (8) 内村「時勢の觀察」『著作集 第二卷』(岩波、二十八年)。
- (9) 内村「吾人を援くる者」『著作集 第三卷』
- (10) 内村「如何にして大文学を得ん乎」『著作集 第十七卷』(岩波、二十九年)。

- (11) 内村「一九二二年十一月二十三日の日記」『代表的日本人』(岩波文庫、一九八五年)。
- (12) 内村「代表的日本人」その著者では英文版 (*The Complete Works of Kanzo Uchimura*, Vol. II *Representative Men of Japan*, With Notes and Comments by Taijiro Yamamoto and Yoichi Muto, Kyobunkan, 1972) がある。岩波文庫版は鈴木俊郎氏が訳し解説も同氏である。拙稿は両方を比較参照して書いたが、引用文は鈴木訳が名訳のため、凡てこれを準拠した。
- (13) 内村「菊花薫る」『代表的日本人』
- (14) 内村「拡張の横線」『著作集 第四巻』
- (15) 内村「何故に大文学は日知る乎」『著作集 第十七巻』
- (16) Thomas Carlyle, *On Heroes, Hero-Worship and the Heroic in History*, edited with an introduction by Carl Niemeyer (Lincoln & London: U. of Nebraska Press, 1966).
- (17) Ralph Waldo Emerson, *Representative Men in the Complete Works of Ralph Waldo Emerson* (Boston & New York: Houghton, Mifflin and Company, 1903).
- (18) Philip L. Nicoloff, *Emerson on Race & History: An Examination of "English Traits"* (New York: Columbia U. Press, 1961).
- (19) 内村「人物崇拜の害」『著作集 第三巻』
- (20) 内村「好きだから知る人物」『著作集 第四巻』
- (21) 内村「日本國の天職」『著作集 第二巻』
- (22) Ralph Waldo Emerson, "Carlyle," *Lectures and Biographical Sketches in The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*.
- (23) 内村「初秋黙想」『著作集 第三巻』

(つ)の著・行(じ)の著、米文学・英米哲学、千葉大学教授